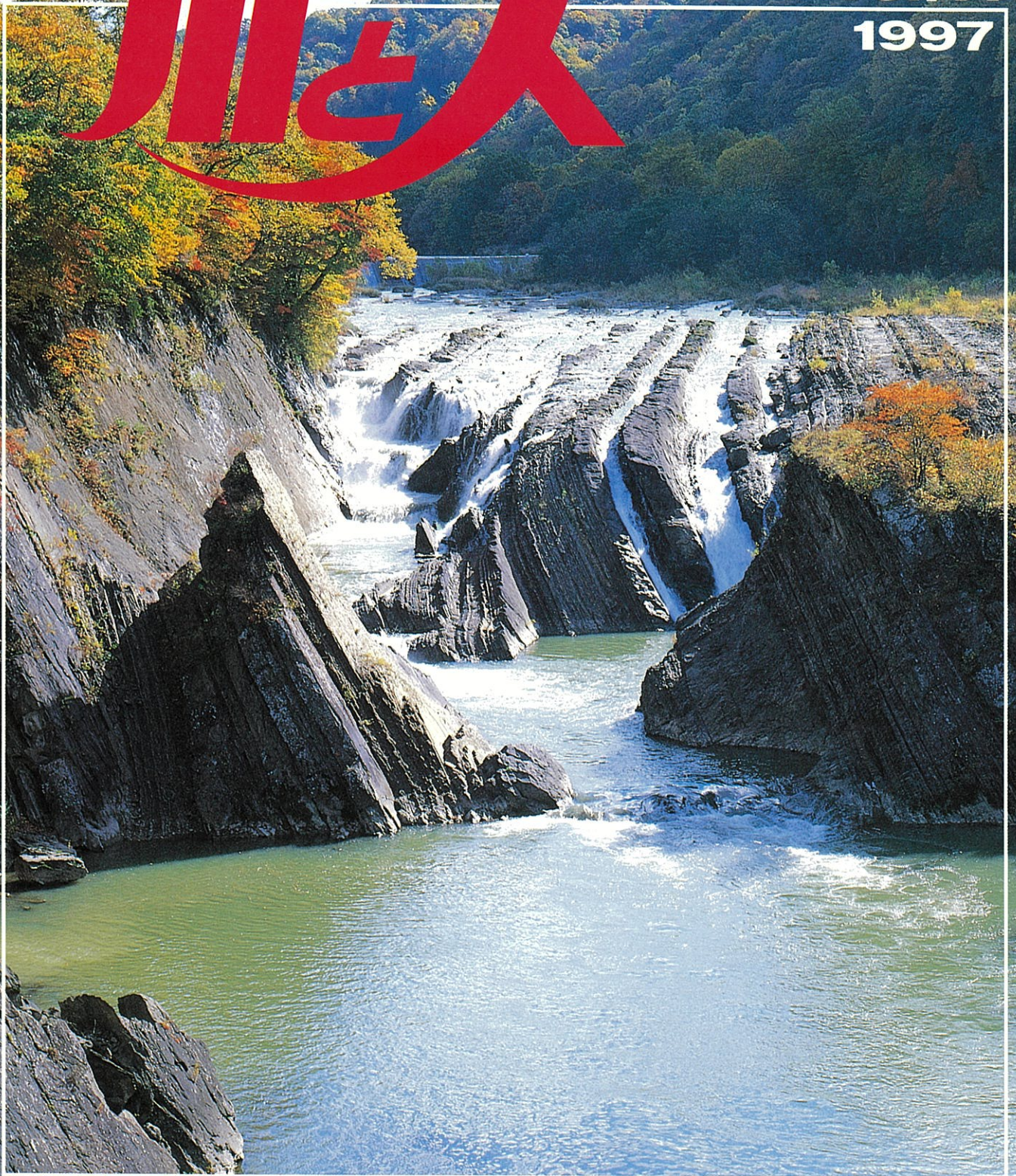




Vol.11
1997





CONTENTS

■石狩川名所めぐり

- 比布町 ぴっぷスキー場・百年記念公園・ピリカ飛瀑 3
- 美唄市 アルテピアッツァ美唄・ふるさとの見える丘・東明公園・宮島沼 4

■HISTORY

- 雨竜川の源流 2
- 幌加内町母子里 日本最寒地マイナス41.2度 5・8

■TRAVEL SKETCH

- 遅かなるバイオニアバレー 9・12
- 阿部 修也

■流域市町村の紹介

- 上富良野町 火山十勝岳と共にいきる 13
- 妹背牛町 自然環境を生かした地域づくり 14

■インタビュー 川に生きる

- 美浦渡船 船頭 国田 忠英 15・16

■河川事業の紹介

- 北海道開発局 17
- 新しい河川制度について 17
- 北海道開発局石狩川開発建設部 18
- 三笠水辺の楽校「であい」開校 18

■トピックス

- 北海道 19
- 里の川・野の川づくり 愛石新川ふるさとの川整備計画 19

■石狩川振興財団の活動報告

- 平成9年度 石狩川水防公開演習開催 20
- 「97灯りて乾杯!!…夢灯り」開催される 20

■「トーク&コンサートinとかち」の開催

- 「97北海道Eポート大会in尻別川」 21
- 「97全国ダム・流域交流フェスティバル」南富良野大会の開催 22





ピリカ飛瀑



ストロベリーフェスタ



比布町

大雪の山々に見守られ、石狩川が脈々と流れる大地。
四季折々のドラマはここから造られる。



比

布町は米どころ上川盆地のほぼ中央に位置し、道北の中心都市旭川市に隣接した緑豊かな田園のまちです。石狩川の恵みを受けた肥沃な大地では、水稲を中心にそ菜等の豊富な農作物が生産されています。

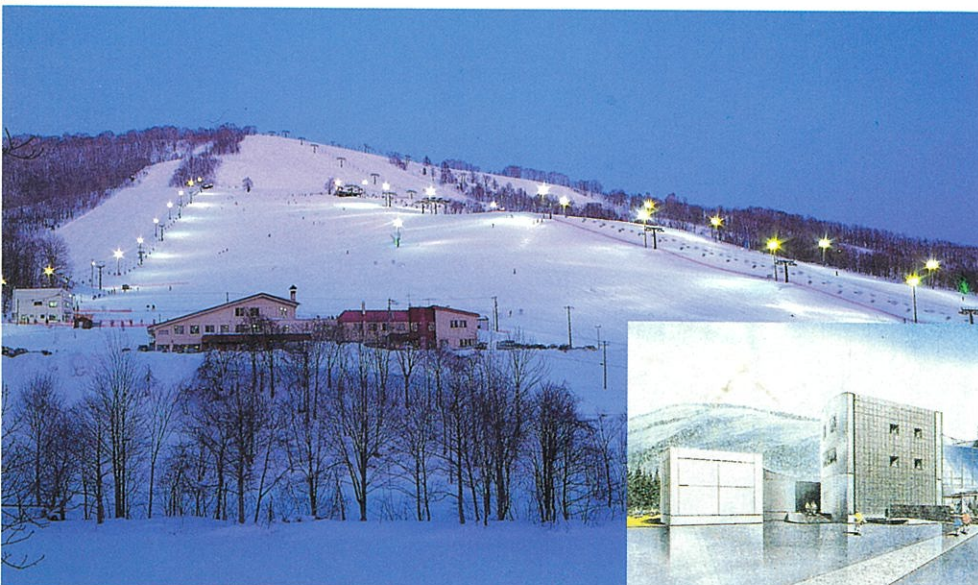
石狩川の支流比布川の源流にいたる北嶺山の麓にはびっぶスキー場があり、例年多くのスキーヤーで賑わいを見せています。また、スキー場周辺では多くのイベントも計画され夏はびっぶ名産のいちごを題材にしたステージイベントやパラグライダー等のスカイスポーツのメッカとしても好評です。

町では、スキー場の近くに高規格道路のICが建設されることから、この周辺の通年観光振興計画をすすめており、その核となる温浴、宿泊、保養機能を備え、都市の皆さんと農村の人達が交流できる施設が明年秋完成を目途に着工しています。また、周辺には自然をいかしたパークゴルフ場や親水広場、散策道路等の整備も予定しています。

VIEW POINT

百年記念公園

総面積12,800㎡という広大な敷地に、野球場、テニスコート、サッカー場、パークゴルフ場等が整備された、緑豊かな総合運動公園。この公園は開基100年記念事業の柱として造られ、町内はもちろん、町外の人々にも親しまれています。スポーツでさわやかな汗を流した後は親水広場へ。清らかな小川のせせらぎが疲れを癒してくれます。



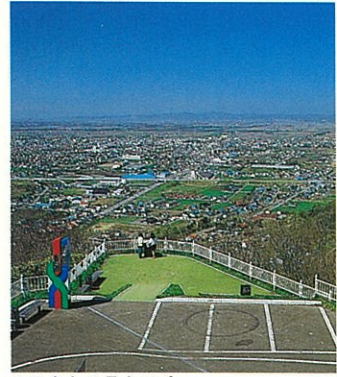
びっぶスキー場



びっぶスキー場の近くに建設中のセンターハウスの完成イメージ図



アルテピアッツァ美唄



ふるさとの見える丘



宮島沼

美唄市

約4万羽のマガンが旅の途上、
羽を休める、美しき唄のまち。



美

唄市は、石狩平野のほぼ中央にあって、札幌市と旭川市の中間点に位置しており、日本一の直線道路「国道12号」とJR函館本線を中心に、東部には山岳地帯、西部には美しい田園の広がる自然豊かなまちです。市の東部に位置するアルテピアッツァ美唄は、廃校となった小学校の再利用により開設された芸術文化交流施設で、世界的彫刻家・安田侃氏の作品が内外に常設展示されており、人々の注目を集めています。また、この芸術空間を利用して音楽・舞踏などの発表会や講演

会が行われています。そして、標高約240mの展望台「ふるさとの見える丘」からは、空知平野の雄大な眺めが堪能できるとともに、空知管内随一を誇る桜の名所「東明公園」も眼下に一望できます。そして西部には、緑の田園に囲まれて静かに水をたたえる、日本最大・最北のマガンの寄留地「宮島沼」があります。毎年春と秋、約4万羽以上のマガンが4000kmの旅の途上、ここに羽を休めに来ます。マスコミでもたびたび取り上げられ、シーズンには多くの観光客が訪れます。

VIEW POINT

東明公園

空知管内随一の桜の名所。満開の時期になると、たくさんの花見客で賑わい、夜は60基のボンボリが遊歩道を灯し、風情豊かな夜桜が楽しめます。また秋は色鮮やかな紅葉に彩られます。園内には美唄市の「過去・現在・未来」をイメージした「カリヨンの塔」がそびえ立ち、「美しき唄のまち」にふさわしく、24個の鐘が四季折々のメロディーをやさしく奏でます。





雨 雨竜川は、石狩川の431支流の中で、空知川（196km）に次いで、二番目（177km）に長い支流である。この源流部分の幌加内町母子里は、昭和53年2月17日にマイナス41.2度の日本最寒地を記録した所である。

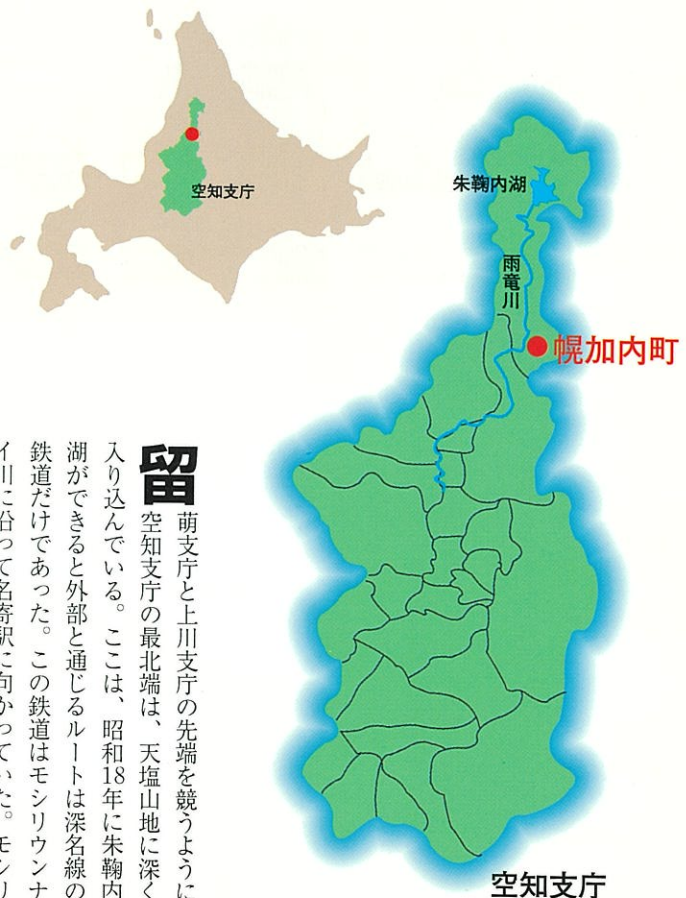
これを記念して現在、クリスタルパークが造成され、氷片を思わせるようなモニュメントが天を突いている。土地の青年は寒さが来れば、春が来ると言うが、一月の下旬から二月の上旬にかけて、マイナス30度とか、マイナス35度の寒さが波のように迫ってくる。寒波とはよく言ったものと思うが最初の体験者には、とてもとてもこの寒さの中で春を考える余裕などない。雪道の雪の塊を蹴るとカララン、カランと空き缶を蹴ったような音がする。また、畑に積もった雪は、まさにパウダースノー、澱粉のように風の吹くまま舞い上がる。樺太の生活体験者は言う。ここは樺太そっくりだと。標高約300メートルであるが、山間部を吹き抜けて来た風が、ここにきて一気に上昇するからこの寒さが生じるといふ。

雨竜川の源流 幌加内町母子里 日本最寒地マイナス41.2度

地方史研究家
ト部 信臣



日本最寒地を記録した記念に造られたクリスタルパーク内のモニュメント



留 萌支庁と上川支庁の先端を競うように空知支庁の最北端は、天塩山地に深く入り込んでいる。ここは、昭和18年に朱鞠内湖ができるまで外部と通じるルートは深名線の鉄道だけであった。この鉄道はモシリウナイ川に沿って名寄駅に向かっていた。モシリ（島、ウシ）(ある)、ナイ(川)から、この地名は生まれた。平成七年、深名線は廃止され、名寄へは、テセウ・ルベシベ川（天塩・峠道沢）を通るバス路線へと変更になり、鉄道で40分を要したものが車では15分に短縮された。天塩川水系には、有利里川に出るのであるが、ウリリ・ルベシベ（雨竜・峠道沢）からついた川の名である。道内にルベシベのアイヌ語は数多くあるが、もともとは、ル(路)、ベツ(それ)に沿って下ってくる(ベ)者(者)という意味である。天塩の人々の視点から見ると雨の人々が下つて来るからウリリ・ルベシベとなる。反対に、雨竜の人々の目から見ると天塩の人々が下りてくるところだからテセウ・ルベシベとなる。近年開通した名寄への道路は、その昔、アイヌの人々の空知から天塩への最短ルートであった。それは、石狩川水系から天塩川水系に出る北部の最短ルートということになる。

江戸時代の雨竜川

雨竜川の雨竜は、アイヌ語に由来するが、その語源となると「神のみぞ知る」と言っている識者は断定しない。フウリウという怪鳥がいて村人を困らしていたので、このフウリウ伝説から生じたというのが有力である。ウという水鳥がいて、この鳥の足跡のウリロベツからだと言って譲らない人もいる。

雨竜川のことを幕府の実測図に現れるのは一八三〇年頃の天保年間のものである。これには現在、北竜町和から恵岱別川をさかのぼり、増毛の信砂川に出る信砂越が朱書きされている。ヲシラリカ（尾白利加）、ラムシロナイ（面白内）、エタイヘツ（恵岱別）などの里程が明記されている。冬の雄冬峠は航路の難所であるので、増毛に上陸し、この信砂越えをして石狩川を下ったのは、文化5年（一八〇八）津軽落兵等であった。

松浦武四郎は安政5年（一八五四）雨竜川をさか登っている。信砂越もしている。雨竜川上流の現在の鷹泊ダムの所を次のように書いている。

「北側の岩伝いにもりを杖の代わりに大きな岩の上をとび石伝いに三百間余りいくと、兩岸はいよいよ高くなって筆では書き表すこともできないような奇景である。ここで行き止まりとなって川の流れば緩やかに、深い湖に水をたたえている。藁のつるをとって石を重りにして水深を測ってみたが十尋（18メートル）の長さでも底にとどかなかつた。」（石狩日誌・丸山道子訳・五月十四）



戸田農場事務所（それ以前は華族組合農場事務所）



雨竜川上流図（雨竜カムイコタン）



この碑より東へ200メートル行くと戸田農場事務所と戸田農場跡がある



戸田農場事務所跡



報恩 町村金弥に自作農創設を記念して

雨竜原野の開拓

華族組合農場

明治22年（一八八九）、三条実美、蜂須賀茂顕、戸田康泰、大谷光寅、秋元興朝等は、雨竜原野五万ヘクタールを払下げを受けて華族組合農場を開設する。農場事務所は、尾白利加川が、雨竜川に合流する地点である。国道275号を新十津川から雨竜に入る所に雨竜発祥の地の史跡碑がある。その下方にここより200メートルと矢印がされている。直線の道路との交差点にトラクターの車庫がある。窓などはとても立派なもので何かの由緒を感じる。これが華族組合農場事務所であり、後に戸田農場事務所となったものである。そこから少し西に行った所が町村農場であり、現在も会館があつて記念碑も建っている。明治23年（一八九〇）から、いよいよ本格的な事業を開始した。道庁は、札幌農学校第一回卒業生の柳本通義を農場監督に派遣し、柳本の一年後輩の町村金弥を事業主任とした。アジアで初めての憲法ができ、国会が開かれる時に直面して、かつての殿様、公家たちがその地位を確保するために、資本家的経営方式の大農論に基づく農業経営の試みである。エアシャー、ジャージー、ホルスタインなどの乳牛、プラウ、カルチベーターなどの洋式の大規模農業機械、バタリー製造器などが雨竜原野に持ち込まれた。交通路は、江別―月形―滝川（樺戸波止場）をのぼってくる蒸気船、そこから四里の刈分道を歩くことであつた。明治25年空知川左岸に空知大駅ができると鉄道が中心となる。雨竜原野を縦断して日本海側の増毛に抜ける増毛街道は明治23年（一八九〇）に樺戸集治監の囚人労働によって工事が進められ、翌年には開通している。

蜂須賀農場

明治24年（一八九二）12月25日、わが国最初の国会解散、続いて選挙となった。選挙事務を推進する内務大臣品川弥二郎らは選挙大干渉を命じたため、負傷者88名、死者25名が出る惨事となった。明治25年（一八九二）5月2日第三回帝国議会で野党は、この選挙大干渉は藩閥政治の証左として「北海道の土地払下げ」の不正を追及した。内務大臣は実態を詳しく調査して、対処することを約束した。

この一連の動きの中で、明治26年（一八九三）3月、華族組合雨竜農場は解散することになった。開墾地一九三ヘクタールを除いて五万ヘクタールを返還した。蜂須賀、菊亭、戸田、大谷の四華族は、返還地の中から、それぞれ別個に新しく土地貸し下げを申請し、各農場が分立することになる。蜂須賀農場は、六一六四ヘクタールの官有未開地の貸し下げと約九〇ヘクタールの耕地を所持した。明治29年（一八九六）以降は洋式農業機械を入れての直営方式を改め、小作を入れての経営となる。さらに明治30年（一八九七）からは自力で用水路建設にかかり、明治37年（一九〇四）には完成して水田耕作に方向を転換する。これは北空知で一番に早い事業であった。大正の末から昭和の初期にかけて数度にわたる小作争議が広がり、全国にその名が知れわたった。現在、雨竜町では、蜂須賀農場事務所を中心に史跡公園をつくっている。開設当時五寸くぎほどの大きさの赤松の苗を植えたというのが、今は見事な並木となってその風格を現代に伝えている。



雨竜郡蜂須賀農場（明治39）



雨竜郡蜂須賀農場（明治39）



蜂須賀農場灌溉溝之水門（明治39）



蜂須賀農場第一分水（明治36）



蜂須賀農場用水溝（明治末）

雨竜の山男 幌加内町

ある猟師が雨竜川の奥へ山狩りに行った時、三人の人間が向かい合って焚火をしていました。ところが、猟師の姿を見たたん、こつ然と消えてしまい、焚火をしていた後に、三張りの弓と矢だけが残されていました。それを拾って持ち帰ると、それからは猟運にめぐまれました。火を焚いていた跡には灰が少し残っていて、火を焚いたように雪が消えておらず、また足跡も雪輪の紐のあとがついているだけで、ぬかったあとがなかったということです。

雨竜川の奥のニ又とワツカ・ウエンベツ（飲水の悪い川）との間に、十六キロ四方もあるエゾ松の林があり、ここにはキムン・アイヌ（山男）がいるから入ってはいけないといわれていました。

山男は間寒別の奥にもいたといいますが、山男は普通のアイヌと同じだが、非常に煙草が好きで、アイヌがよくさらわれて行方不明になるといわれています。これが連れて歩くキムン・セタ（山木）というのは狼とは違うが、恐ろしいものだとはいわれています。

雨竜川の木材の流送

雨竜川の山間部は道内でも有数な森林地帯である。明治の中頃になって木材の需要が増してくると流送が行われる。流送には、木材をバラで流す散流と筏に組んでいる筏流しの二つの方法がある。

散流：網羽

散流は、木材を上流から下流に流して受けとめる最も原始的な方法である。上流からバラで木材を流すと堤防、橋梁などを破壊するので道庁では、明治36年（一九〇三）12月までと期限を定めて許可をしていた。しかし、実際には、鉄道の施設と追っかけてこして昭和の初頭まで続いた。木材の集散地は、江別、砂川、沼田と北上してくるが、それは、木材を受け止める網羽を見ればわかる。砂川では、まず、砂川から対岸の新十津川に親網という太いワイヤーを張る。この親網からヨメというワイヤーを川の中に向けて張り廻し、これに角材を縛りつけ、つまり川の中に木材を浮かべる半円形の巨大な壁をつくる。もともと対岸まで張った網のことをアバといったが、木材を受け止める施設の総体を網羽と言っている。明治43年（一九一〇）に留萌線が開通して鉄橋より下流の散流が禁止されると沼田が雨竜川の木材の集散地となる。石田与作、呉座宇太郎等が流送を一手に掌握していた。昭和4年（一九二九）深名線が幌加内市街まで伸びると深川の宇作美木材は、木工場を設



尾白利加駅通と波止場跡

置し、少し上流に網羽を設けた。時ならぬ増水で破られたら困るので二重に網羽を設けた。昭和7年（一九三二）朱鞠内まで鉄道が伸びると、少し上流のウツナイ川、ブトカマ川、朱鞠内川の合流地点（雨竜三股）で網羽を張った。宇佐美と豊島と二つの工場が、期間を空けて雨竜川を使ったこともあった。

筏流し

筏の構造は、普通二十四尺、縦十二尺のものを一タキといい、六タキを二人一組で操った。前方に乗るのがサキといい、熟練の筏師士で、後の方は経験の浅い者でアトといていた。サキの場合は沼田から江別まで行つて八十円〜九十円であった。当時農家の出面は、一円〜二円二十銭であった。順調であれば二日くらいで到着した。服装は、裏付き印半てん、紺の股引き、メリヤスシャツ、手拭のほおかぶり、赤毛布、管笠、ワラジばきで、雨が降ればミノを着るのが普通であった。持ち物は、新権一本、ロープ、ワイヤー猫カンなどであった。

朱鞠内ダム

「雨竜川上流三股に、全道一の発電ダムの建設」（昭和12年6月8日北海タイムスタリ）に雨竜川流域の住民はドギモを抜かれた。突然のことであった。しかし、藤原銀次郎（王子製紙社長）から見るとやつとこぎつけた、の感じであった。大正4年（一九二五）東京帝国大学土木工学科を卒業した溝口潔夫は藤原銀次郎の世話で電気化学工業会社に入社した。大正末から水力発電の場所を探していた。雨竜川上流の北大演習林にその最適地を見出した。当時の北大学長、佐藤昌介は、この地を二百五十万円で売却した。学長はこのお金で宿願であった理工学部を新設し、北海道大学は名実ともに総合大学とした。



現在の朱鞠内湖

昭和3年（一九二八）年藤原社長は「雨竜電力株式会社」を創立し、朱鞠内ダムの建設に着手した。地の利、水の特質、多雪地帯の気候条件を巧みに利用して設計以来9年の歳月を経て雨竜ダムは完成した。昭和18年（一九四三）10月1日、八千万円の巨費を投じた雨竜ダムが完成し、始めて水門を締め切つて貯水を開始した日である。この日から五千ヘクタールの原始林が湖底に沈んだ。石狩川水系に属していた雨流川の水は、雨竜ダムの竣工によって風連の発電所で天塩川に合流することとなった。雨竜ダムの水は、石狩、天塩の国境をトンネルでくぐつて、地上四階地下十一階の落差を流れて風連発電所のタービンを地雷のような音をたててまわし、発電を開始したのである。

雨竜川の流れば永久に

雨竜川が石狩川に合流するのは、江部乙と雨竜を結ぶ江竜橋のところである。明治の20年代は、その右岸であるか、左岸であるかだけが問題になった所である。未開地はその先端の市町村の管轄となつていたので、雨竜川の右岸は、新十津川村が誕生すると新十津川村の管轄となった。雨竜村ができること以北は雨竜村、さらに北竜、上北竜村（現沼田）、そして昭和7年に幌加内村が誕生して右岸の上流部分は幌加内村の所管となった。左岸も深川村、一巳村、多度志村とその先端部分の所管は変わった。また、右岸は、御料林で、左岸は北大演習林でもあった。それ等の所管の推移がどうあれ、雨竜川の流れば永遠である。今まで、全面舗装された道路は、他の地域に出るために多く機能したが、このあたりで人を呼び込む機能を果すにちがいない。

遥かなる

パイオニアバレー

ミシシッピやコロラド川だけが
アメリカの川じゃない！
ニューイングランド地方の
ちよつとマイナーな川
“コネチカット川”と
アメリカの河川を取り巻く
環境についての紹介



Travel sketch

海沿いの湿原（マサチューセッツ州ケープコッド）

北海道開発局 阿部 修也

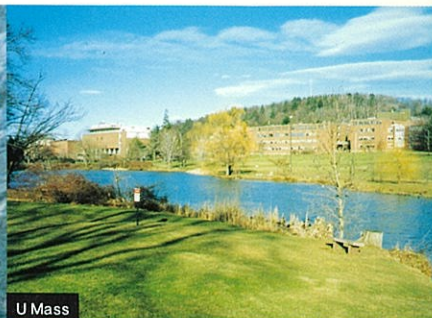


コネチカット川

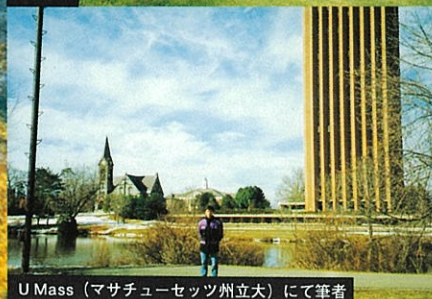
アメリカ合衆国東海岸の北部、カナダ国境に接する小さな州の寄り集まったニューイングランド地方。(北からメイン、ニューハンプシャー、バーモント、マサチューセッツ、コネチカット、そしてアメリカ最小の州ロードアイランド)

ニューイングランドはアメリカ人植発祥の地であり、アメリカ独立の舞台ともなった歴史的な地方である。気候は北海道とあまり変わらない。四季もちゃんとあるが、春秋が少し短い気がする。その中心的な都市はマサチューセッツ州の州都ボストン。

そのボストンから西へ約130kmほど行ったところにニューイングランドを北から南へ縦貫する川がある。その名はコネチカット川 (Connecticut River 正しい発音ではカネテイクェットに近い)。ニューイングランド地方最大の河川で、カナダ国境のコネチカット湖を源にし、ニューハンプシャー・バーモント州境を流れ、マサチューセッツ州西部、コネチカット州を経てニューヨーク市にほど近い大西洋のロングアイランド海峡に注ぐ。マイナーな河川とは言ってもやはりアメリカ、河川延長は約650km、流域面積は約29,000km²の堂々たる河川である。(石狩川の2倍以上) このコネチカット川(以後CT川)に沿った一帯はアパラチア山脈(古生代に形成された褶曲山脈が準平原化して、再び隆起した。最高で2,000mの低い山脈)の裾野の丘陵地帯で、パイオニア・バレー(先駆者の谷)と呼ばれる。何やら名前だけを聞いていると開拓当時に思わせる情緒を感じさせるが、谷とは言っても日本人の想像するような谷ではない。ただの盆地、いや遠くに山が見



U Mass



U Mass (マサチューセッツ州立大)にて筆者



アマースト町役場



アパラチア山脈(メイン州立公園)

える平野なのである。多少面食らってしまったが、現地ではミシシッピ川でもミシシッピ・バレーと呼ばれているのを聞くと、アメリカ人の「谷」の感覚がわかったような気がした。

さて、このCT川。上流から下流まで堤防らしき堤防がない。なるほどこれがアメリカの川に多い掘り込み河道か、と関心して川に近づいてよく観察しようとする、河岸には「私有地につき、オーナー及び関係者以外は立ち入り禁止」と看板が立っている。それを無視して銃で撃たれてもつまらないので諦めたが、水辺に近づきやすい所は大半がプライベートビーチとなっており、金でも出さなければ水辺に近寄ることもままならないのである。国によって管理されている日本の河川とはかなり勝手がちがうのだ。それでもなんとか私有地でない所に潜り込んで河岸の状況を確認したが、水衝部にも護岸らしきものは見られなかった。なぜこの様なことが可能なのか? 何のことはない、勾配が緩やかなため流速が遅く、護岸など必要ないのである。



コネチカット川の河畔林(護岸は見られない)

アメリカの治水

ここでアメリカの治水事業について言及する必要があるだろう。治水事業は通常、地先の自治体がその行政区域内のみを担当しており、連邦政府が対応するのは自治体の要望で調査の必要性が認められ、さらに調査結果により連邦議会で事業認可（地元負担が条件）を受けた場合に陸軍工兵隊により実施される。CT川については1970年代に事業化された改修計画に基づき工兵隊により事業は終了しており、現在は地元自治体による維持補修が中心に行われている。

一方、災害対応としては州が中心的な役割を果たし、災害発生時には各州の災害対応部局が州兵や消防、警察等を動員して対応する。また、細かな住民対応については市町村が担当する。しかし災害が州単独で対応しきれないほど大規模である場合には連邦政府に支援を要請、また連邦政府も被害状況を確認して独自に支援に乗り出す。

話がかなり横道に逸れたが、このCT川は中流の光景はほとんど変化無く、丘の間を延々と川が流れているが、古くから開拓された地域でもあるため、上流ではかなり老築化した利水専用ダムが多く見受けられ、環境に配慮しているとは言いがたい。下流については隅田川とは言わないまでもニューヨークから連なる人口密集地帯を流れるため水質が悪化している。今後この様な河川に対するアメリカ政府（および州政府、自治体）の対応に注目して行きたい。

Travel sketch



コネチカット川の増水（手前の道まで水が来ているが危険は感じられない。これは3日前ぐらいの降雨による）



利水ダム（警告板とカヌー routes の案内）

上流の利水ダム（発電）かなり古い

利水ダム（警告板）

アメリカでやっていることを日本でそのまま採用できるのか？

アメリカへ行って一番感じたのはこのこと。やはり環境が違いすぎる。生活、習慣、自然、地形、そして河川。河川政策はその国の自然環境、生活環境によって大きく左右されるのである。たとえばアメリカ政府にとって洪水を防御することは「本来、利用価値の無かった土地を防御することで価値を高めた。」



コネチカット川（上流）

ことであると言う。国土の広いアメリカにとって、氾濫を繰り返す土地は肥沃ではあるが、利用にリスクが伴う土地である認識が最初からあるため利用者はそれを覚悟の上で利用する背景がある。農業にしても畑作が中心であり、河川のそばである必要がない。その様な危険な地域に財産を持たなくとも他に安全な土地は無数に存在するのである。(大半の平地が沖積平野で、そこにしか生活する場所の無い日本とは根本的に違う。)洪水の発生の方針にしても緩やかで長期的(日本の、急激、短時間とは対照的である。)である。

もう少し具体的な話として、アメリカの氾濫原1km当たりの住宅戸数は25戸で氾濫原面積/可住面積はアメリカで5・8%に対して日本は27・3%と人の住める面積の3割近くが氾濫原となっている。その氾濫原には人口の半分、資産の75%が集中している。この事柄については国民総生産と洪水被害額の比にも表されており、1980年〜1989年の平均で日本は、0・24%に対してアメリカは1/4の0・06%となっている。いかに日本が洪水の危険にさらされ続けているか理解できよう。

このように“資産価値の低い!”アメリカの洪水氾濫原に対して全面的に構造物による洪水防御を実施することは極めて不経済である。そのため、人口密集地域を除いた地域をNFIP*による非構造物治水対策で対応することが可能なのだ。

*NFIP (National Flood Insurance Program) 国家洪水保険。洪水氾濫原の居住者や資産を持つ者が保険料を出して洪水被害に備える連邦政府が主導する保険。氾濫原にあるにもかかわらず加入しない場合は、様々な法的制約が課される半強制的な保険。連邦政府はこれにより洪水氾濫原での受益者負担を強化し、洪水被害に対する助成金や補填の支出を削減できる。



アマースト (町)



マサチューセッツ州立大の中にあるクラーク記念公園 (北大OBの出資による) マサチューセッツ州立大はクラークの母校で、北大とは姉妹校。



UMassの通り



UMass (マサチューセッツ州立大)の1コマ



UMassと近郊の町 (住民の半数が学生や大学関係者)



アマースト (町)の1コマ

だれがたらいの穴を塞ぐのか?

最近のダム不要論にしても首を傾げたくないところがある。「アメリカでダムを作らない様になった。ダムを壊すことにした。だから日本にもいらないんだ。」と言った意見は少々乱暴で各国の持つ条件を無視していると言えよう。広い国土に多数のダムがすでに完成しているアメリカを例えるなら、広い屋敷に降る雨を集めた大きなプールの水を分け合う5人家族、それに対して日本は、穴の開いたたらい(勾配が急ですぐに流出する)に雨水を貯めて使う1人住まいと言った感じで、1人当たりの水使用量が欧米なみに増加している現在、たらいの水が空になる日は近いだろう。はたしてその覚悟が出来ている日本人は何人いるだろうか?

目にかぶる広大な大地

前半はアメリカの河川の紹介、後半は日本とアメリカの差異を考慮しない最近の風潮について、現地を見た人間として浅薄な意見を述べさせていただいた。条件の合う良いものはどんどん採用しよう。それが和魂洋才、日本人の得意技であり、良い面だ。

アメリカには梅雨がない。パイオニア・バレーにもあの暑い季節がやってきたはずだ。強い日差しの中でコネチカット川は1年で一番にぎやかな時期を迎え、今静かに冬を待つ。

上富良野町

火山十勝岳と共にいきる

上富良野町は富良野村として、明治30年7月1日に誕生、現在は本町と中富良野町、富良野市、南富良野町になっています。

上富良野の基礎を築いたのは、三重県からの団体入植者でした。今年は、上富良野開基から数えて百年目に当たり、7月30日には町民と共に多くの来賓を迎えて、盛大な記念行事が行われました。この開基百年を記念して、開拓の祖となった三重県津市と、友好都市提携の調印も行われています。

町を貫く富良野川とヌッカクシ富良野川は、空知川から石狩川へと合流し石狩湾へ注ぎます。しかし、火山十勝岳連峰に源頭を持つこの2河川には魚が住みません。



ラベンダー畑 (ラベンダー祭り結婚式から)



吹上温泉露天の湯 (無料の自然の湯に憩う)

二度の開拓を経験

原生林の開拓から、やがて富良野原野に豊かな水田と畑作地帯が生まれました。しかし、開拓から30年、順調に発展を続ける上富良野を未曾有の災害が見舞いました。大正15年5

月24日、十勝岳が大噴火を起こしたのです。発生

した大泥流は、富良野川沿いに上富良野市街地へ向けて25kmを下り、原生林をなぎ倒し、農地や牧場のある河岸をえぐりました。そして、富良野盆地へ出てからは、上流から運び下った岩石や巨木、そして酸性の強い火山噴出物が、沃野を一瞬のうちに埋め尽くしてしまいました。死者行方不明者144名を出し、畑150ヘクタール、水田326ヘクタールを埋没、流下域の道路、鉄道、河川をすべて破壊し尽くしたのです。

この大惨事を前に、被災地の放棄と復旧の両論が囁かれました。結果として、先人の開いた土地をむざむざ放棄はできないとして、大々的な復旧事業が着手されました。表土の交換や客土による覆土、また道路、鉄道、河川の復旧工事が行われて、5年足らずで耕作ができるまでに回復されました。しかし、鉱毒水が湧きだすため、耕土層が安定して収穫量が回復するまでには、更に幾度とない客土と長い年月を要しました。まさしく、二度目の開拓を経験したのでした。



活火山十勝岳と共生

史実として残されている十勝岳の活動は、安政4年をはじめに、30年から40年周期で5回が記録されています。最新の活動は、昭和63年から平成元年にかけて4カ月間に、21回の小噴火を起こしたのですが、幸いに過去のような惨事には至りませんでした。しかし、一度に火砕流を伴う水蒸気爆発が起こったならば、背筋が凍る思いをした住民は少なくはありませんでした。昭和63年当時は、効果的な噴火対策施設はなく、平均35年間の噴火周期は、記憶を風化させるには十分な時間だったのです。

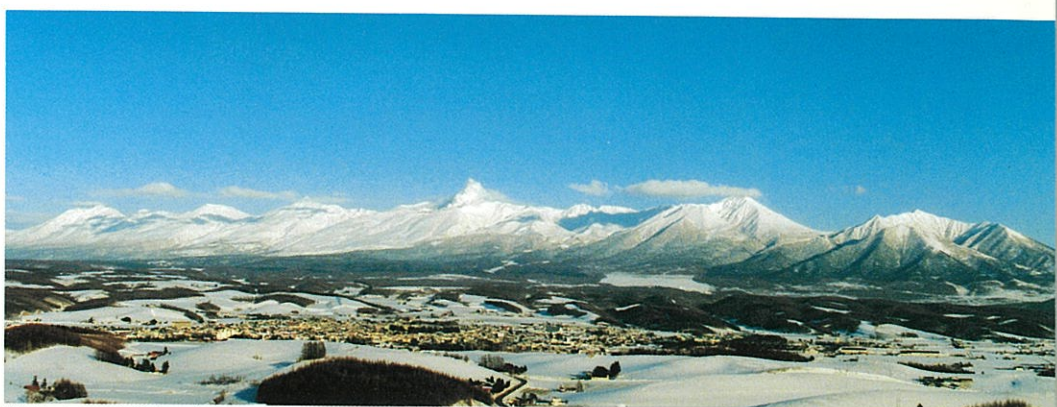
この教訓を生かし、次期噴火災害を前提にして、現在富良野川に、国と北海道により、泥流被害を防ぐための火山砂防施設が大規模に整備されています。また、住民の防災対策組織化、噴火災害訓練、防災施設見学会などを通して、火山と共生する町として、自然の営みに対面していこうとしています。

この十勝岳の火山活動は、上富良野に恵みももたらしています。長い年月がつくりだした火山地形やそこに根づく植物群は、登山やハイキングを楽しませる豊かな自然環境を与えてくれます。また、豊富な温泉は、保養と憩いの場として、多くの人を集めます。ラベンダー耕作発祥の地、また観光作物への転身の地でもある上富良野は、人々が集う活気あふれるまちづくりを続けています。

上富良野町市街地全景



火山砂防透過ダム (施設見学会から)



噴煙を上げる十勝岳と連峰のパノラマ

自然環境を生かした地域づくり

MOSEUSHI CHOU

妹背牛町



妹背牛町農村運動公園鳥瞰パース

本町は、山岳丘陵のない平坦な地勢で南に石狩川、西に雨竜川が町を抱えるように流れ中央を大鳳川が貫流しており、水資源に恵まれた自然環境のもと、米を中心とする農業の町として良質でおいしく安心して食べていただける米づくりを積極的に進めています。更に、最近ではスターチスやかすみ草など切花栽培も盛んに行われており、着実に生産を伸ばしています。

また、平成5年1月にオープンした妹背牛温泉「ペベル」は、開設以来人気を博しており、毎年20万人を超える人々が安らぎを求め本町を訪れています。

妹背牛温泉「ペベル」に併設されている遊水公園「うらら」はパークゴルフ場（18ホール）、遊水池、親水路などが6・4haの敷地に配置され、平成10年度には本格的にオープンする予定となっております。ペベル温泉を核としたふれあいゾーンとして交流人口の増加が期待されています。こうした動きを受けて、平成8年度からスタートしている第6次町づくり計画では地域CⅠ（コミュニティ・アイ



遊水公園「うらら」

デンティティ）の展開によるイメージアップ戦略への取り組みも進めています。

また、当地域はこれまで幾度となく水害に見舞われ、農作物に大きな被害をもたらしており、治水対策は地域の安全性を高めるための最も重要な課題となっています。平成8年度から進められている雨竜川捷水路事業は、雨竜川のショートカットや大鳳川の合流地点の移行を内容とする河川改修工事となっております。この改修工事が完了すると、水害のない安心した生活が提供されると共に、河川掘削土を有効活用した大区画圃場整備など近代化された農業の展開が進められる一方、河川景観に配慮した緑地整備や親水空間が確保され自然豊かな郷土が創造されます。



捷水路事業



妹背牛温泉ペベル



まらとまらをつなぎ、
川と人をつなぐ懸け橋として…

昔から人々は何らかの形で川を利用し、そこから様々な文明が生まれました。明治の始め、北海道開発にあたっては、川は交通路として大いに利用されました。川岸にはいくつもの渡船場があり、人馬の往来や貨物の輸送が頻繁に行われ、特に石狩川流域には三笠、夕張地区の炭鉱もあって、石炭の搬出に重要な役割を果たしていたのです。川岸は大小いくつもの船と往来の人々で溢れ返っていました。

川の風景が一変した現在、その時代をしのばせる唯一の渡船が、美唄市と浦臼町をむすぶ美浦渡船です。

美浦渡船 第4代目 船頭

国田忠英さん
(樺戸郡浦臼町)

INTERVIEW

川に生きる



〔美浦渡船〕

浦臼町渡船場(晩生内)／美唄市渡船場(中村)

運航期間／4月1日から10月31日まで(11月1日から3月31日運休)

運航時間／1日3回 午前8時・正午・午後4時

(他、急病など重要要件の場合)

運休(渡船場詰所に赤旗を掲げる) 流水、強風、増水等
危険と認められた場合

料金無料

問い合わせ／☎0125-67-3404(国田)

美唄へつなぐ
交通手段として活用された、
道内唯一の渡船

『この渡船は大正5年から始まったんだ。対岸の奈井江、美唄方面のように早くから交通体系が整備された地域と違って、浦臼では重要な交通手段だったからね。特に炭鉱のまちとして栄えた美唄には大きな病院もあって、通院や買い出しにたくさんの人が利用していたよ。浦臼では5か所の渡船場があったけど、中でもここが一番活躍したんじゃないかな。庶民の足として定着していたからね。一番親しみを持たれていたよ。だから、現在も残っているんだと思うよ。』

昔は馬船や大船もあったよ。馬船は昭和30年頃まで使われてたんじゃなかな。

美浦渡船の船頭にならないかという話があったのは、ちょうど30才前の時だった。長く続けてもらうには若い人の方がいいだろうという事だったんだろうね。私は泳ぎも達者だからね。しかも家がここから近いから、大雨の時に対処が早いこともあったんでしょう。町長さんから直々にお話をいただいたので、断るわけにはいかないよね。』

第4回

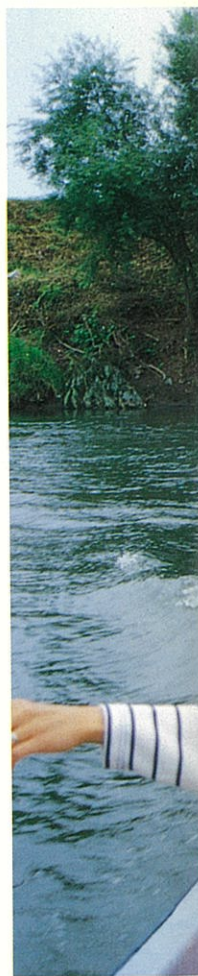
お客様の満足そうな顔を 見るために・・・

『この渡船は美唄へ行くために、船頭になる前からずっと利用してたわけだからね。親しみをもってたよ。』

それで自分が船頭としてお客さんを乗せた時、お客さんから“ありがとう”とか“あー良かった”といわれたことが一番印象深いね。何年やつてもそういう言葉がもらえるのがこの仕事の楽しみでもある。そのお客さんの満足する顔を見るためにも、安全面には常に気を使っている。なにしろ人の命を預かっているわけだから、舵取りにはいつも神経質になるよ。その昔は川下に流されたりいろいろな事故もあったからね。一番重要なのは、流木や水の流れを読むこと。これは永年の経験と川を知ってるからこそできるんだと思うよ。だから向こう岸についたら、正直ホッとする。その日の仕事が終わったら、今日も一日無事だったと思うよ。』

石狩川の美しさを 褒めてくれることが 一番の喜び

『昔と違って、現在は主に観光客を乗せるよ。みんなこの川の美しさにはびっくりして感動して帰っていくよ。』石狩川ってこんなにきれいだったんだ。ってね。川岸に茂る柳の木が穏やかに揺れる風景がすばらしいとも言うね。あとは水のきれいなにも感動してくれるね。川の景色がきれいだといってくるのが、私にとっては一番うれしい事なんだよ。』



ただ残念なことにここ10年、水かさが減っている。晴天が続くと水が少なくなるんだ。今は船が渡れるギリギリの深さだよ。』

身を以って知る、 川の美しさと恐ろしさ

『これだけ水がきれいだからね。この川にはウグイやフナとかいろいろな魚がいるよ。これからの季節なら、海から鮭が上ってくるよ。もう少し水が多かったらそんな姿もみられるんだろけど・・・。私が子供の頃はよく泳いだよね。そんな経験があるから、今船頭をやっているらねえと思う。川の美しさも怖さも身を以って知っているから。』

昨日は小学5・6年生の子供達を70人くらい乗せたんだ。その前も乗せた。この渡しに珍しいから記念にと学校側が連れて来るんだよ。子供達はすごく喜ぶよ。でも、船から両手を出して水をさわったりしてヒヤヒヤするよ。今の子供達は川で遊ばないから、川の怖さを知らないんだよね。水がきれいだから水遊びしてほしいよ。そうやって川と遊ぶことで自然を学ぶことができるんだね。あとは雨が怖いね。昔築堤がなかった頃はよく氾濫したよ。向こうは（美唄）はこっちより少し地盤が低いから被害が大きかったね。思い出すのは洪水で美浦丸が流されて、探すのに1か月かかったこと。それが一番の失敗かな。なにしろ美浦丸とは私が船頭になったからの長いつきあだから。皆からも親しまれた船でもあるんだ。』



百万凧祭りとは 美浦大橋完成後の渡船

その日は「百万凧祭りin美唄」が開催され、石狩川の河川敷にはたくさんの方々が色とりどりに舞い上がっていました。全国の凧愛好家が約120人も参加、約3万人が来場する大きなイベントです。お祭りの中では美唄市と浦臼町の間には、永年の願いである「美浦大橋」

美浦渡船の船頭さんとしてこの辺りの有名な人でもある国田さん。2006年の美浦大橋の完成後は、開拓期の風情を残すこの渡船も廃止の方向に向かっていきます。しかし、住民や渡船に乗った人を中心に、国田さんが元気づけようとは廃止すべきではないとの声もあがっています。

の完成と実現をスローガンとした活動も行われました。国田さんは町の要請で平成4年からお祭りに参加し、浦臼からの来場者を渡すばかりか、自身が「北の凧の会」の会員として、お祭りの最大の目玉でもある美唄と浦臼を結ぶアーチ凧を上げてきました。

『私たちの凧には“美浦大橋”と書いて上げてきた。初代の船頭さんが立派な人で、美浦大橋の実現に向けて活動した人だったから、私もその意志を受け継いで。』

橋が架かったら美浦渡船は廃止される方向に進んでいる。でも歴史的価値や観光資源という意味をもっと考えてもいいんじゃないかな。私は美浦渡船は残すべきと考えている。今この渡船にのってきたくてくる人達は、わざわざ川を渡りたいといってくる人達なんだ。そしてすごく喜んで帰ってくるんだ。そんな姿が見たいし、この仕事に愛着があるから、体が続く限りやっていきたい。とにかく、こんなきれいな石狩川があつて、そこで船にのせてもらえる喜び・・・。私はもちろんそれを知っているし、たくさんの人にも味わってもらいたいんだ。』



現代では数少ない、川と人がふれ合う場として、国田さんの果たす役割は大きく、その願いが叶う事を望みます。

新しい河川制度について (河川法改正)

わが国の河川制度は、明治29年に旧河川法が制定され近代河川制度となり、昭和39年に制定された新河川法では、水系一貫管理制度の導入など、治水、利水の体系的な制度の整備が図られてきました。

しかしながら、その後の社会経済の変化により、近年、河川制度をとりまく状況は大きく変化しており、河川の担う役割は、治水・利水のみならず、うるおいのある水辺空間や多様な生物の生息・生育環境として捉えられ、また、地域の風土と文化を形成する重要な要素としてその個性を活かした川づくりが求められています。さらに、社会経済・生活様式の高高度化に伴って、渇水による社会的影響が著しくなるなど、円滑な渇水調整の推進などが課題となっています。

こうした変化を踏まえて平成8年12月、河川審議会において「社会経済の変化を踏まえた今後の河川制度のあり方について」が提言され、これを受けて、河川法の改定を行い、平成9年6月4日に「河川法の一部を改正する法律案」が成立しました。

主な改正内容は、以下の通り

主旨…治水・利水・環境の総合的な河川制度の整備

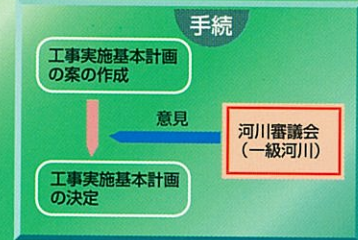
- ① 河川環境の整備と保全
 - ② 地域の意見を反映した河川整備の計画制度の導入
 - ③ 渇水調整の早期化、情報提供、手続きの簡素化
 - ④ 河畔林、ダム湖畔林整備のための樹林帯制度
 - ⑤ 原因者の施行、負担による水質処理対策
 - ⑥ 不法係留船舶の売却、廃棄等の実施
- これらの主旨を活かし、今後、河川行政において水質、生態系の保全、水と緑の景観、河川空間のアメニティといった国民のニーズの応えるべく事業を実施していきます。

河川事業の紹介

改正前の計画制度

工事実施基本計画

内容
基本方針、基本高水、計画高水流量等
主な河川工事の内容

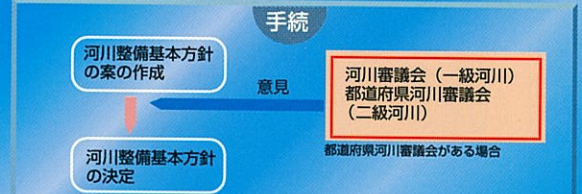


河川工事

新しい計画制度

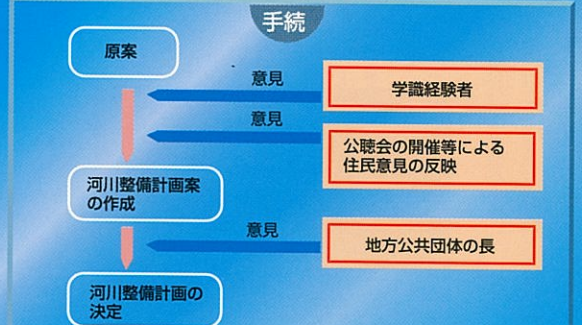
河川整備基本方針

内容
基本方針、基本高水、計画高水流量等



河川整備計画

内容
河川工事、河川の維持の内容



河川工事、
河川の維持

参考:新しい河川制度の構築/平成9年河川法改正
監修 建設省河川局 発行(社)日本河川協会

三笠水辺の楽校

『であい』開校

◎事業の目的

子供達の健やかな成長のためには、学校とともに家庭や地域社会において、さまざまな体験が必要と言われています。

しかし、近年、家庭や地域社会を取り巻く環境の変化やライフスタイルの変化に伴い、子供達にとって、自然体験や生活体験、遊びなどの機会が少なくなっている状態にあります。また、学校教育現場では、体験的な活動を重視する観点から、週休5日制の実施や、生活科の新設が行われる等、個性を生かす教育の充実が図られています。

一方で、身近に存在している河川は、治水利水の機能に加えて自然環境、レクリエーションの場、文化・芸術の題材等、様々な機能を有しており、子供達の遊び場、自然体験にとって格好の場所となっています。水辺の楽校プロジェクトは、このような河川の持つ様々な機能を生かし、河川を身近な遊び、自然体験の場として整備及び管理し、あわせて、先生方や地域との関係者の協力を得て、その積極的な利用を推進するものです。

河川事業の紹介



開校式



開校式

釣遊び

全景

◎整備方針

水辺の楽校設置に向け、地元市民、カヌー愛好家からの声を生かしたのが最大の特徴であり、水遊び、ゲンゴロウやヤゴ、オタマジャクシなど水生昆虫や生物を間近に見たことのない子供達にとって体験しながら学習ができるよう施設配置を行いました。

楽校内を流れるせせらぎ水路は、危険水位が一目でわかる水位計「あそ棒」も設置し安全に対する配慮も施しました。

また、カヌー愛好家のためにカヌーの離発着場も整備し、多様化する河川への要望を取り入れました。

◎開校式

平成9年6月21日待望の開校式を迎えました。主催者である三笠市長の挨拶のあと市議会議員、石狩川開発建設部次長の来賓祝辞、そして水辺の楽校『であい』に夢を託し、人とのふれあい、自然・生物とのふれあいの思いを地元の小学生が詩文としてまとめられ、代表して瀬戸久美さんが発表されました。

三笠市立新幌内小学校
瀬戸 久美

「水辺の楽校であい」
いつだって生き物に出会えたら
みんなかわいいわーって思うよね
川の中から生き物にいつしよに遊ぼうっていわれたら
すく友達になれるよね
そんな出会いうれしいな
お日様にここに青い空
まっくら光るせせらぎ
「おはよう」こんにちはってあいさつしたよ
そんな出会いうれしいな
笑顔で出会える水辺の楽校ありがとう

楽校設立にあたっては、三笠の将来を担う子供達が大きな役割を果たされました。水辺の楽校『であい』と命名された方、詩文に取り組んで頂いた学校に対して感謝状が贈られました。

開校を記念して記念植樹も行われ、やがてこの木が大きく育ち水辺の楽校を緑でつつみ、すばらしい自然ができることを期待しました。テープカットにより楽校がオープンし、小学生、地元町内会の方々など160名の参加者は青空のもと楽校内の水辺に下り、水に触れたり、散策をし開校を祝いました。

◎利用状況

夏休みには、「三笠の湖・川・緑を愛する会」が小中学生を対象に釣りあそび、レスキュー資格を持つインストラクターによる川の泳ぎ方教室が開催されました。

秋に向けてはリバーウォッチング、幾春別川を語り観察する会など行事が組まれています。さらに、地元の小学校は1・2年生を中心に理科、生活科の校外学習の利用が計画されており、事業の目的である子供からお年寄りまで校外体験学習、親水体験を通じて自然や地域の交流など楽しく学べる水辺の学校に期待が寄せられています。



釣遊び

北海道開発局 石狩川開発建設部

里の川・野の川づくり 愛宕新川ふるさと川の川整備計画

旭川市の東部地区の治水対策として、基北川・小股川等4河川を市街地上流部で切替へ牛朱別川へ合流させる、放水路として開削中の愛宕新川で検討中であった、ふるさとの川整備計画がこの度建設省から認定されたのでその概要を紹介いたします。

愛宕新川は旭川市郊外の水田地帯を開削して新たに生まれる人工的な河川ですが、左岸側は土地区画整理事業などにより、新興住宅地として発展してきている地域であり、旭川市の公園整備や緑の基本計画と一体となった新たな「ふるさとの川」の創出が期待されています。

- 整備計画は基本方針を、
- ① 自然環境の創出
 - ② 水環境の復元
 - ③ コミュニティの形成
 - ④ 防災拠点としての整備
 - ⑤ レクリエーション空間の形成
- の5つとしています。

川事業の紹介



里の川整備イメージ



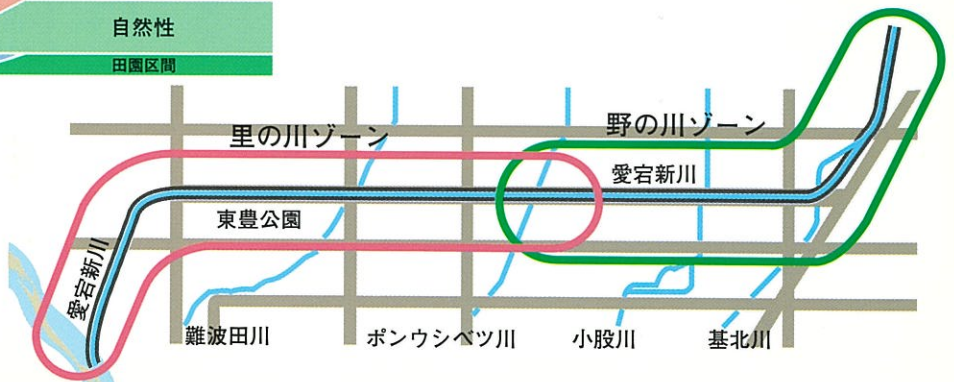
緩勾配の河岸のイメージ

計画区画約5・2kmを大きく「里の川ゾーン」と「野の川ゾーン」の2つのゾーンに分け、下流側の「里の川ゾーン」では、市街地に接し日常的に利用されることが想定されることから、適度な自然を有しながらも親水性に重きをおいた整備を行うこととしました。上流側の「野の川ゾーン」では、市街地とは若干の距離があることから、自然豊かな環境を創出し水辺の自然を利用した野外学習のフィールドとなるような整備を行うこととしました。また、放水路により分断され、流量が減少することとなる残流域に維持流量を流すために、水路橋を設置することとしました。

河川管理者は通常の掘削・護岸のほか、河岸の植生の回復、水辺に近付ける階段の整備、底水路や野外学習の場となるような緩勾配の河岸や蛇行のある水辺の整備、管理用通路、水路橋の設置等基盤の整備を行います。

旭川市は、河川の管理用通路を利用したサイクリングロードの整備のほか、川沿いの緑地帯の形成をめざして植樹、ベンチ等の設置を行います。また、利用者の核となる、東豊公園についてはすでに整備が始められています。また、地域のコミュニティの場となるよう、周辺地域の住民による愛護団体を創設し清掃活動やイベント・野外学習の支援を行うこととしました。

以上概要を紹介しましたが、河川側の基盤整備は平成13年完了を目標としています。市の緑地帯整備等は、息の長いものとなりそうですが、市民参加等を考えながら、手づくりで地域に密着した本場の意味の「ふるさとの川」となることが期待されています。



『6,000の灯りが石狩川を彩る』

『ものをいう日頃の備えと機動力』

「'97灯りで乾杯!!…夢灯り」 開催される

平成9年度 石狩川水防公開演習開催



旭川市内の石狩川河川敷「リベライン旭川パーク」で8月2日、「灯りで乾杯!!…夢灯り」(主催/点灯虫の会)が催され、牛乳パックにロウを流し込んだ手づくりのろうそく(旭川キャンドル)約6000本が幻想的な風景を創り出しました。

これは北海道の七夕の日でもある「石狩川の日」(8月7日)にちなんだ恒例の行事で、今年で8回目を迎えました。

夕方からのオープニングセレモニーでは広島平和記念公園の「平和の灯り」が、メイン



出水に備え、水防機関の密接な連携と水防技術の向上、ならびに水防意識の高揚を図るため平成9年度石狩川水防公開演習が砂川遊水地内(砂川市西4条地先)において6月11日に行われました。主催は北海道開発局と北海道、砂川市等14市町、全国水防管理団体連合会、他に陸上自衛隊、北海道警察、日本赤十字社北海道支部、各消防組合・各消防本部、砂川赤十字奉仕団、(社)空知建設業協会の協力で演習当日見学者を含め約3000名が参加し行われました。

キャンドルに点火され、これを合図に会場に並んだ6000本のキャンドルに次々に点火されました。

この日はあいにくの小雨模様でしたが、集まった市民は思いを込めて作った夢灯りの世界に酔いしれていました。

そして6日の広島原爆記念日には、旭川から400個の夢灯りが贈られ、原爆ドームの周りには、旭川キャンドルがピースキャンドルとして灯されました。

「川と橋の街」という共通点を持つ両市が灯りを通じて結びつき、平和のメッセージを世界に向けて発信することで、光の交流の輪は石狩川を拠点に大きく広がっていきました。

午前9時より開会式が開始され北條次北海道開発局長、田村正志北海道副知事、佐藤静雄建設政務次官の挨拶の後、演習本部長の天谷直純札幌土木現業所長指揮の下演習に入りました。

演習は、第1部水防訓練、第2部地震対策訓練に分けて行われ第1部は演習想定発表後、現地実施部設置、河川巡視、住民避難、水防訓練、内水排除、孤立者救助、応急給食、水防工法体験等が、第2部では演習想定発表後、河川巡視、地震応急工法、転落車両救助、救護架橋訓練等が行われました。各訓練に参加した機関は、本番さながらの水防及び地震対策訓練を展開しました。

また、次世代、繋げる水防意識のもと砂川小学校全生徒460名の見学、生徒代表による工法の実施及び視察、破堤実験を行いました。



閉会式は、新山惇北海道開発局建設部長の講評、中川徳男砂川市長の挨拶の後演習本部長の解散にて3時間の演習を終了しました。

会場には、演習と併せて各水防工法の工法の展示、災害対策車等の展示、洪水時気象体験コーナー、市町村コーナーなども行われました。



活動報告

97.7.30

“心の水辺を旅する。”

「トーク&コンサートinとかち」の開催

治水事業に対する理解と地域交流を深めるため、7月30日帯広市とかちプラザで「トーク&コンサート97 inとかち」が開催されました。
プログラムは第1部にフリーアナウンサーの大久保真弓さんのトークショーを、第2部では琴、尺八、ギターのユニークなグループ「遠音」によるコンサートが行われました。



HBCアナウンサーを経て、カナダ留学経験を持つ大久保さんは、十勝川やカナダ、ヨーロッパの川と人との関わりについて軽妙に語り、「北海道」をテーマに、作曲、コンサート活動を続け「十勝音の大使」にも任命されている「遠音」が、「石狩川」「十勝野」など十数曲を演奏し、詰めかけた観衆を魅了しました。

97.7.26.27

成熟社会の扉を開く流域連携・・・

「97北海道Eボート大会in尻別川」

川を軸とした、上・下流の交流による文化創造が行われる地域社会の実現を目指した、全国ネットのEボート交流事業はExchange（交流）の他にEcology（生態）・Environment（環境）Eternity（永遠）、そしてEducation（教育）のニュアンスが込められています。95年は千歳川、96年は石狩川中流域の滝川市、道内で3回目の今年は、尻別川の蘭越町とニセコ町に舞台を移し、7月26日、27日の二日間、多くの流域住民が参加して開かれました。26日は、フォトコンテストと抽選付き川下りで、尻別川本流、大谷地区から目名地区までの、7キロメートルを、64艘のボートや、カヌーが、清流である尻別川に近づき、自然を楽しみながら、川下りに挑戦しました。川下りのあと、ニセコ町の町民センターにおいて、講演会「Eボートを巡るスポーツ環境」と「ハーモニーセンターと青少年活動」

がありました。また、「尻別川を青少年活動の拠点に」をテーマとした、シンポジウムが行われ、河川環境や流域連携について意見が出されました。27日は、ハイライトのEボートタイムトライアルが、尻別川で行われました。遠くは滝川、札幌、恵庭、室蘭、小樽、そして地元から18チーム、216名が参加、北海道代表を決める大会でもあつて、強風のなか、白熱するひとこまもありましたが、自然と一体となった、カヌー、ボートの素晴らしさを満喫していました。Eボートの優勝は、小樽開発建設部チームです。10月11日、多摩川（関東）での、全国大会でも交流を深めています。最後に、流域懇親会と表彰式が行われ、尻別川でのEボート交流事業の成功を、参加者スタッフとともに称え合いました。



'97.7~8

「石狩川クリーンアップ作戦」の実施

「石狩川クリーンアップ作戦」は8月7日の「石狩川の日」の関連事業として、平成6年度より実施し本年度は4回目を数えます。作戦の実施は、7月から8月までの期間で地域の河川愛護団体、ボランティア団体及び町内会などが中心となって、身近な河川の堤防、河川敷、水辺などに投棄された空き缶、ゴミなどを拾い集め清掃するもので、今年度は473団体、11,612人が参加しました。

また、本作戦は広報活動として、PRポスターの掲示のほか、各市町村の広報紙及び川にかかわる各種イベントのポスターを利用して活動の理解と浸透を図りました。



編集後記

- ◎「寒さが来れば、春が来る」と言う最寒地の人たち。昔はじっと耐えて春を待ったが、いまや寒さや雪を売りものにする時代。地域の努力が実り、舗装道路が多くの人たちを呼び込むことを願う。
- ◎同じ谷でも片や溪谷、片や盆地や平野。地勢・地形の違いでこんなに意識が異なる。外国との比較は、いろいろな状況をしっかり把握しておかないと判断を誤る恐れあり。
- ◎河川舟運を見直し、復活させようとの機運がある中、廃止に向かう渡船あり。現実には厳しいが、石狩川の舟運がいつの日か復活することを願いながら息長く夢を追い続けたい。



'97.6.28.29

「'97全国ダム・流域交流フェスティバル」南富良野大会の開催

最近の地域づくりにおいて「交流・連携」という概念が注目されているなか、石狩川流域空知川の上流、南富良野町の、かなやま湖において「'97全国ダム・流域交流フェスティバル」が6月28・29日開催されました。金山ダムは「地域に開かれたダム」として早くから周辺整備が進められ、水辺を利用した様々な行事が行われており、その活用方法を議論することは全国のダム所在市町村にとっても大きな意味があるものと思われれます。フェスティバルは筑後川、神通川流域等、全国各流域から多数の参加を交えて、フォーレストステージとしてシンポジウム「流域連携の実践方策とパートナーシップづくり」、「地

域に開かれたダム」の活用と地域づくり、「川の上下流交流の実践と事業方法の検討」をテーマとして、基調報告の後、4分科会に分かれて討議を重ね、全体会議で総括、「大会アピール」を採択し盛会裡に終わりました。



また、翌日のセカンドステージでは、地域間交流の実践例の一つとして、北海道におけるダム（湖）を拠点とした流域交流のモデルケースとしてEボートを使った交流行事を実施し、2日間の行事を無事終了いたしました。





羽衣の滝 東川町

山賊から羽衣を奪い返してくれた若者に、天女は美しい羽衣の舞を踊ってみせた。すると不思議なことに、滝はみるみると大きな羽衣の形をした滝に変わっていった——
幾重にも曲がりながら、岩肌を白く染める落水。そのあまりにも優美な姿から、天女の羽衣伝説は生まれた。天人峡の羽衣の滝。高さ270m、その落差道内（全国第二）、水量も豊富なこの滝は、北海道文化財名勝指定を受け、日本の滝100選にも選ばれた、まさに日本を代表する滝である。この季節は、断崖に茂る紅葉と白い落水が見事に調和し、絵画のような姿を見せる。